

◆外国人児童生徒の総合的な学習支援事業◆

# 外国人児童生徒のための JSL対話型アセスメント

ディー

エル

エー

# DLA

Dialogic Language Assessment  
for Japanese as a Second Language



文部科学省初等中等教育局国際教育課

## はじめに

平成 24 年 5 月現在、公立の小・中・高等学校等には日本語指導が必要な外国人児童生徒が 27,013 人、また日本国籍を持つ日本語指導が必要な児童生徒は 6,171 人在籍しています。これらの日本語指導が必要な子どもたちは、日常会話が十分にできない児童生徒だけではなく、日常会話ができても学年相当の学習言語能力が不足し、学習活動への参加に支障が生じている児童生徒も含まれます。

しかしながら、日本語指導の目安となる日本語能力をどのように把握するかは長年の課題であり、特に子どもを対象にした日本語能力の測定については、各地域で工夫されているものの測定方法の開発が求められています。

これらの御意見をを受けて文部科学省では、平成 22 年度から 24 年度にかけて「外国人児童生徒の総合的な学習支援事業」を実施し、そのひとつとして国立大学法人東京外国語大学に委託して「学校において利用可能な日本語能力の測定方法」の開発を行ってまいりました。数多くのモニター調査と学校や教育委員会でのヒアリングを重ね、児童生徒の日本語能力を把握するだけでなく、その後の指導方針を検討する際の参考にもしていただける資料を揃えていただきました。

本書を各学校における日本語指導の場で御活用いただき、日本語指導が必要な児童生徒へのよりきめ細かな指導・支援にお役立ていただければ幸いです。なお、本測定方法は当省ホームページにも掲載する予定ですので、併せて御活用ください。

末尾となりましたが、本書の作成に当たり御尽力を賜りました関係の皆様へ深く御礼申し上げます。

平成 26 年 1 月

文部科学省初等中等教育局国際教育課長  
神代 浩

# 外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント

## 目次

はじめに

### 理論編 —DLAとは—

#### 序章 「日本語能力測定方法の開発」の背景と目的

1. 事業の趣旨…………… 3
2. 外国人児童生徒の日本語能力測定方法を開発する上での諸課題 …… 3
3. 外国人児童生徒の言語能力観…………… 3
4. CF（会話の流暢度）・DLS（弁別的言語能力）・ALP（学習言語能力）の連続性と個別性 …… 4
5. 開発から生まれた実感…………… 5

#### 第1章 「対話型アセスメント（略称「DLA」）」の概要

1. 「対話型アセスメント（DLA）」のねらい…………… 6
2. 「DLA」の特徴…………… 6
3. 「DLA」を使用する際の基本的なステップ…………… 6
4. 「DLA」が測定しようとしている言語能力…………… 7
5. 「DLA」の構成と内容…………… 7
6. 「DLA」の進め方…………… 9
7. 「DLA」と日本語能力の判定方法…………… 9
8. 「DLA」の流れ…………… 10
9. 「DLA」の評価における機能と精度…………… 12

### 実践編 —「DLA」実践のために—

#### 第2章 「DLA〈はじめの一步〉」

1. 〈はじめの一步〉概要…………… 15
2. 〈はじめの一步〉実践ガイド…………… 18
3. 〈はじめの一步〉診断シート…………… 20

#### 第3章 「DLA〈話す〉」

1. 〈話す〉概要…………… 23
2. 〈話す〉実践ガイド…………… 28

3. 〈話す〉診断シート	31
<b>第4章 「DLA〈読む〉」</b>	
1. 〈読む〉概要	37
2. 〈読む〉実践ガイド	42
3. 〈読む〉診断シート	63
<b>第5章 「DLA〈書く〉」</b>	
1. 〈書く〉概要	73
2. 〈書く〉実践ガイド	80
3. 〈書く〉診断シート	96
<b>第6章 「DLA〈聴く〉」</b>	
1. 〈聴く〉概要	105
2. 〈聴く〉実践ガイド	111
3. 〈聴く〉診断シート	127
<b>第7章 測定の結果と評価・個人指導記録</b>	<b>137</b>

## 評価キット

### 別冊資料

1. **DLA** 〈読む〉 レベル別テキスト
2. **DLA** 〈聴く〉 映像 (DVD)

### 巻末資料

1. **DLA** 〈はじめの一步〉 語彙カード 149
2. **DLA** 〈話す〉 基礎カード・タスクカード・認知カード 156
3. **DLA** 〈書く〉 作文課題 163
4. **DLA** 〈書く〉 作文用紙 165
5. **DLA** 〈聴く〉 映像 (DVD) スクリプト 168
6. **DLA** 〈聴く〉 視覚補助教材 (キーワード) 172

## その他

FAQ	178
主要参考文献	185
協力者一覧	188

# 理論編

# 序章 「日本語能力測定方法の開発」の背景と目的

## 1. 事業の趣旨

- ・ 公立学校に在籍する日本語指導が必要な児童生徒が増加する中、外国人児童生徒に対する教育の充実が喫緊の課題となっています。
- ・ 日本語指導は、背景の異なる外国人児童生徒の日本語能力に応じて行うことは大切なことですが、具体的な言語能力のイメージが共有されているわけではありません。
- ・ 言語能力の測定方法においては、全国的に利用可能な汎用的な測定方法が開発されているわけではありません。
- ・ 教育現場におけるニーズ調査等を踏まえ、また、実証を重ねることにより、全国的にどの学校でも使用可能な日本語能力測定方法の開発が求められています。
- ・ このような状況を踏まえ、「**対話型アセスメント（略称「DLA」：Dialogic Language Assessment）**」の開発に至りました。

※本事業は、文部科学省「外国人児童生徒の総合的な学習支援事業」の一環で、具体的名称は「学校において利用可能な日本語能力測定方法の開発（平成 22～24 年度）」です。

## 2. 外国人児童生徒の日本語能力測定方法を開発する上での諸課題

- ・ 現行の多くのテストは、編入時の初期指導の到達度評価が主流となっていて、児童生徒のその後の伸びの予測や、教科指導に直結する指導には必ずしもつながっていません。
- ・ また、テストは、「文字、文法などの言語要素」に主眼がおかれ、めざすべき子どもの言語能力、具体的に何ができるようになるかという視点が共有されていません。
- ・ 現状のテストでは、児童生徒の母語をはじめ認知力の把握が困難なために、潜在的な能力を活用した指導がむずかしく、言語能力の測定も困難にしています。
- ・ そこで、外国人児童生徒の言語能力を測定する場合、日本語能力のレベルのみならず、年齢にともなう認知力の発達段階に考慮する必要があります。
- ・ 日本語能力は、母語、年齢、入国年齢、滞在年数（四大要因）による影響を受けるので、これらを考慮した測定ツールにする必要があります。

※本事業で自治体対象に実施したアンケート調査結果より。

## 3. 外国人児童生徒の言語能力観

- ・ 本事業では、子どもたちの言語能力を以下の 3 つの側面（カミンズ、2006 の講演資料（中島・湯川訳）より）から把握し、測定ツールの開発の基本としています。

① **Conversational Fluency=CF（会話の流暢度）**：日常的な学校生活に必要な会話力で獲得に普通 1～2 年必要とされるもの

- ・ よく慣れている場面で相手と対面して会話する力です。

- ・母語の会話の流暢度は、就学年齢 4、5 歳から 8 歳の間に高度に発達します。
- ・頻度数の高い語彙と簡単な文法構造の使用を含みます。
- ・第二言語学習者は、学校や周囲の環境を通して第二言語への接触を始めて 1 年ないし 2 年で流暢な会話力が伸びるのが普通とされています。

② Discrete Language Skills=DLS (弁別的言語能力)：個々の技能によって習得に必要な時間が異なる

- ・言語とリテラシーの規則的な側面。音韻意識（単語が弁別可能な音で成り立っているという認識）、フォニックス（音と文字との関係についての認識、文字を読み取る力）、文字認識、単文を形成する力（大文字や句読点に関する規則、スペリング、文法）、語彙、文法構造が主なものです。
- ・これらの技能は、次のいずれかの方法で獲得されます：(a)直接指導の結果、(b)読み書き活動の実体験を通して。
- ・音韻意識と文字を読み取る力、文字解読力は就学後 2 年ぐらいで獲得が可能だと言われています。したがって学校言語の初期の文字を読んで理解する力は母語話者とほぼ同じように進んでいくことが知られています。

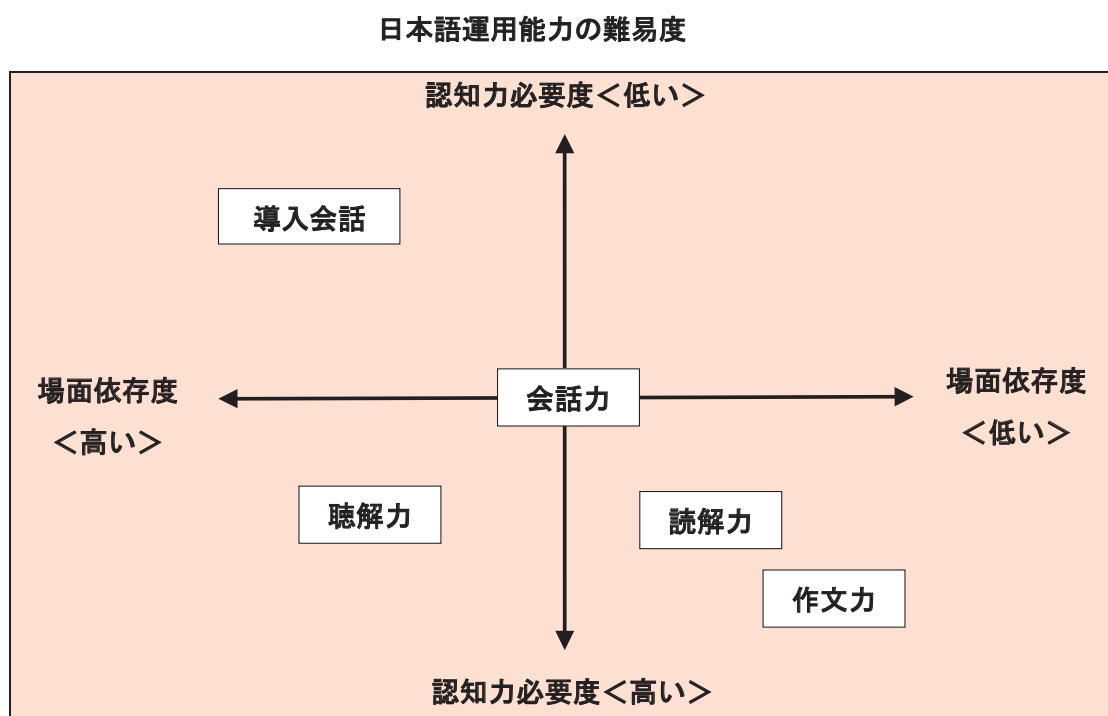
③ Academic Language Proficiency=ALP (教科学習言語能力)：学年相当レベルに達するのに 5 年以上必要とされる能力

- ・ますます複雑になる話し言葉と書き言葉を理解し、かつ産出する力を指します。学年とともに、日常会話ではほとんど聞くことのない低頻度の語彙、複雑な構文や抽象的な表現などが出てきます。教科学習では（例：国語、社会、理科、算数・数学）、言語的にも概念的にも高度な文章を理解することが要求され、またそれらを正確に統合して使うことが必要とされています。
- ・外国人児童生徒が母語話者レベルに追いつくのに、教科学習言語に接触してから少なくとも 5 年が必要だと言われています。これは教科学習言語が複雑であると同時に、外国人児童生徒が、語彙、概念、読み書き能力が伸びつつある母語話者児童生徒に向かって追いつくことを強いられるからです。
- ・教科にかかわる読解力を伸ばすためには、弁別的言語能力を獲得する方法とは異なった指導法が必要です。特に、語彙や教科学習言語能力を伸ばすためには、読解力育成に焦点を当てた多読が必須です。

#### 4. CF (会話の流暢度) ・ DLS (弁別的言語能力) ・ ALP (学習言語能力) の連続性と個別性

- ・ 1、2 年も経てば、流暢な日本語を話し日常生活では問題のない子どもが、教科学習に困難を感じるのには、求められる日本語能力が異なることによります。
- ・ 日常会話では場面の助けによって日本語の習得が容易ですが、教科学習では書き言葉としての日本語能力に加え、教科固有の語彙や背景知識が求められるために、習得には時間がかかり、日本人児童生徒とは異なる方法で指導することが必要になってきます。
- ・ 上記の言語力は三者択一的な能力ではなく、場面依存度と認知力必要度の連続性の中に位置する言語能力で、特に教科学習には場面の助けのない高度な認知力を必要とします。

- ・指導者は、子ども達の潜在的な能力（母語力や母語で培った知識）を活用しながら、教科に必要な日本語能力と学力を伸ばしていく指導を心がけることが重要です。
- ・子どもの日本語能力の測定及び判定においては、以下の図に示されるように初対面で必要な導入会話をを行った上で、まず基礎となる会話力を測定することが大切です。
- ・その上で、教科に結びつく読解力、作文力、聴解力の習得度を測定する必要があります。
- ・教科学習においては抽象度の高い語彙力や認知力が求められることから、これらの力の測定に焦点をあてた評価ツールを用意し、子どもの日本語能力を総合的に判断することが必要になってきます。



## 5. 開発から生まれた実感

外国人児童生徒の日本語能力評価において大切なことは、子どもたちが何を学び、どのように学んでいるかをはっきりと理解し、指導者が子どもたちに何をどのように学んでほしいのか、また最終的にはどのような力が必要なのか指針あるいは学習のゴールを把握することにあります。学習のゴールなくして、指導の具体性や教材の有効性、そして評価の方法は見えてきません。

今回開発した「DLA」は、日本語能力が限られる中で、最大の認知活動を引き出そうとするものです。それにより、子どもの「できること」の最大値を把握し、同時に子どもの能力を伸ばす機会ともなります。子どもにとって学びの機会であると同時に、指導者にとっても、指導に関する気づきを得る機会となるものであることを願っています。

なお、本冊では、「測定ツール」と「評価ツール」、「日本語能力」と「日本語力」「日本語運用能力」、「実施者」と「評価者」、「児童生徒」と「子ども（達）」「JSL児童生徒」「JSL児」を同義で扱います。



# 第1章 「対話型アセスメント(略称「DLA」)」の概要

## 1. 「対話型アセスメント(「DLA」)」のねらい

- ・「DLA」は、基本的には、日常会話はできるが、教科学習に困難を感じている児童生徒を対象としています。
- ・子どもたちの言語能力を把握すると同時に、どのような学習支援が必要であるか、教科学習支援のあり方を検討するための「DLA」をめざしています。
- ・「DLA」によって、指導者は児童生徒が何をどのように学んでいるのかを知ることができます。また、学習支援のための指導計画の助けとなり、学習活動及び教材の選択について考える際のヒントを与えます。
- ・児童生徒の学びにとって意味のある指導計画を立てることによって、子どもたちの学びに対する興味関心、学習意欲を喚起し、学習動機を高めることが可能です。

## 2. 「DLA」の特徴

- ・「DLA」は、いわゆる従来型の紙筆テストや集団テストとは異なっています。
- ・それは、子どもたちの母語、年齢、入国年齢、滞在年数(四大要因)によって影響を受ける言語運用力や思考力、学びの方法等が多様であるために、これまでの画一的なテストでは、子どもたちの本来の力を引き出すには限界があるからです。
- ・「DLA」は、テストから得られる結果を序列化するためのものではなく、むしろ、テストの実施過程そのものを、学びの機会として捉えるところに特徴があります。
- ・さらに、一番早く伸びる会話力を使って、紙筆テストでは決して現れることのない、潜在的な力を引き出します。
- ・そのために、「DLA」の活用方法は「対話型」を基本とします。それは、指導者が子どもたちに向き合う大切な機会(対話重視)であると考えからです。
- ・指導者と子どもたちが一対一で向き合うことで、日頃の学習の成果を、そして今後の支援活動で必要となる学習内容や学習領域を絞り込んでいく上で必要な情報が得られるような構成をねらいとしています。
- ・厚い言葉の壁の中で教科学習言語能力を伸ばそうとしている外国人児童生徒は、個々の子どものレベルに適した評価者のちょっとした問いかけや語りかけ(誘い水のようなもの)によって、その力の片鱗を見せることがあります。
- ・ゆえに、「対話型」の「DLA」は、年齢相応の言語能力を持たない子どもの教科学習言語能力評価法として妥当性があると言えます。

## 3. 「DLA」を使用する際の基本的なステップ

- ・測定ツールを有効に使うには、次のステップを踏むことをお勧めします。
- ① 評価の目的を明確にする：「DLA」を使って、子どもたちのどのような側面、例えば、言語能力面であるのか、思考力などを必要とする認知面であるのか、具体的に知りたいことを明確にする。「DLA」から知りたい情報を確認する。
  - ② 評価ツールを選ぶ：「DLA」で提示されたいくつかの評価ツールから、目的に合ったものを選ぶ。
  - ③ 評価ツールを理解する：事前に評価ツールの実施方法をよく読み、進行方法を十分に理解しておく。
  - ④ 子どもたちの力を最大限発揮させる：「DLA」の実施にあたっては、「DLA」<はじめの一步>(詳細は後述)を通して、ラポール(共感できる信頼関係)を築き、持っている力を思う存分発揮できるよう配慮する。また、技能別テストが可能かどうかを判断する。

#### 4. 「DLA」が測定しようとしている言語能力

- ・「DLA」は、〈はじめの一步〉（「導入会話」と「語彙力チェック」）と、〈話す〉〈読む〉〈書く〉〈聴く〉の4つの言語技能から構成されています。
- ・「DLA」のそれぞれのテストは、おおむね以下に示すような言語能力の測定をねらいとしています。①②③については序章を参照してください。

テストと測定能力

測定能力 テスト	①CF (会話の流暢度)	②DLS (弁別的言語能力)	③ALP (教科学習 言語能力)
◆導入会話	○		
◆語彙力チェック		○	
●DLA 〈話す〉	○	○	○
●DLA 〈読む〉		○	○
●DLA 〈書く〉		○	○
●DLA 〈聴く〉			○

#### 5. 「DLA」の構成と内容

- ・「DLA」を活用するために、以下のものが用意されています。

##### ◇「実践ガイド」

- ・「実践ガイド」は、各技能測定の概要を説明し具体的な手順を詳述したものです。

##### ◇「評価キット」 (別冊資料および巻末資料)

- ・「DLA」実施の際に評価者が必要とするカード類、読みテキスト、作文用紙、映像DVD、キーワードのイラストなどが含まれます。以下に技能ごとに使用するキットの一覧を示します。

技能別評価キット一覧

テスト名	評価キット
◆〈はじめの一步〉 「導入会話」	
◆〈はじめの一步〉 「語彙力チェック」	「語彙カード」
●DLA 〈話す〉	「基礎カード」「タスクカード」 「認知カード」
●DLA 〈読む〉	「DLA 〈読む〉 レベル別テキスト」(7冊)
●DLA 〈書く〉	「作文用紙」 「作文課題」
●DLA 〈聴く〉	「聴解用映像」(DVD 1本) 「視覚補助教材 (キーワード)」

## ◇ 「診断シート」

- ・「診断シート」は各技能の測定結果を記入するものです。

## ◇ 「DLA 実施レポート」・「DLA 採点表&lt;全体評価&gt;」（実践編 第7章で詳述）

- ・「診断シート」で得られた結果をまとめて記入するものです。

## ◇ 「JSL 評価参照枠&lt;全体&gt;」

- ・「DLA」では、各技能別のテストの開発と共に、日本語の力の段階を6段階の「ステージ」に分け、総合的かつ多面的に記述した「JSL 評価参照枠」を作成しました。
- ・「JSL 評価参照枠<全体>」では、「在籍学級参加との関係」と「支援の段階」を6ステージで示しています。
- ・ステージ1～2は、日本語による意思の疎通がむずかしく、サバイバル日本語の段階です。在籍学級での学習はほぼ不可能で、手厚い指導が必要です。
- ・ステージ3は、単文の理解がむずかしく、発話にも誤用が多く見られるレベルです。クラス活動に部分的参加を始めつつ、個別的な指導をすることが必要です。
- ・ステージ4は、日常生活に必要な基本的な日本語がわかり、自らも発話ができる段階です。話し言葉を通したクラス活動にはある程度参加できるレベルです。しかし、授業を理解して学習するには読み書きにおいて困難が見られ、個別的な指導が必要です。
- ・ステージ5～6は、教科内容に関連した内容が理解できるようになり、授業にも興味をもって参加しようとするレベルです。読み書きにも抵抗感が少なく、自立的に学習しようとする態度が見られます。必要に応じて支援をしていくことが必要です。

## JSL評価参照枠&lt;全体&gt;

ステージ	学齢期の子どもの在籍学級参加との関係	支援の段階
6	教科内容と関連したトピックについて理解し、積極的に授業に参加できる	支援付き 自律学習 段階
5	教科内容と関連したトピックについて理解し、授業にある程度の支援を得て参加できる	
4	日常的なトピックについて理解し、学級活動にある程度参加できる	個別学習 支援段階
3	支援を得て、日常的なトピックについて理解し、学級活動にも部分的にある程度参加できる	
2	支援を得て、学校生活に必要な日本語の習得が進む	初期支援 段階
1	学校生活に必要な日本語の習得がはじまる	

#### ◇「JSL 評価参照枠<技能別>」

- ・各技能別評価で得られた結果と、日常の授業態度やテストの結果などと合わせて、総合的に日本語能力の発達段階を評定し、今後の支援の必要度を判断するために「JSL評価参照枠<技能別>」を示しています。
- ・日本語や教科の学習が進むにつれて、子どもの言語能力や思考力も変化します。学習の節目でもある時期（学期末、学年末）に「DLA」を実施して、子どもの変化や変容、でき具合などを判定するために「JSL評価参照枠<技能別>」を活用してください。

#### ◇「個人指導記録」（実践編 第7章で詳述）

- ・「DLA」の結果を記録します。

## 6. 「DLA」の進め方

- ・「DLA」は、「学びの力を伸ばすテスト」「学習支援に役立つテスト」をめざしているため、実施方法は「対話」を重視し、マンツーマン形式で行います。
- ・子ども一人あたりの所要時間は、45～50分以内で実施してください。したがって、実施においては、子どもが一人ずつ受けられるよう準備してください。
- ・ただし、子どもの状況によって必要な時間が異なるため、明記されている所要時間は大体の目安としてください。特に、「導入会話」やDLA〈話す〉は、対話の流れを崩さないように無駄を省いて、短時間で終わるようにする必要があります。
- ・一人あたりの所要時間の目安は、「はじめの一步」は5分程、「話す」は15分程、「読む」は30分程、「書く」は40分程、「聴く」は15～20分です。
- ・どのテストを実施するかは、実施者が決めます。子どもの日本語能力に応じて、適宜選択してください。

#### <留意点>

- ・実施者は、児童生徒が理解しやすいように短文、単文で話すよう心がけます。
- ・実施者が質問する時は、「～ですか/ますか」のような「です/ます体」で質問します。
- ・実施者は、子どもが話している時、話をさえぎったり否定したりしないようにします。
- ・実施者は、子どもが日本語による発話や作文等で詰まっても、すぐに答えを与えることはせず、答えを誘導するように支援します。
- ・実施者は、子どもの力を最大限に引き出すために忍耐強く話したり書いたりするのを待ちます。
- ・質問が理解できないと思われる時は、言い回しを変更せずに、3回ぐらいまで繰り返します。

## 7. 「DLA」と日本語能力の判定方法

### 7-1. 包括的尺度と分析的尺度

- ・外国人児童生徒の日本語能力の判定においては、日頃の観察や指導を通しての反応からある程度推測したり、把握したりすることが可能です。しかし、指導者個々人の主観的な判断によることが多く、子どものレベルを具体的に示すとなると共通の尺度上で評価する必要があります。
- ・「DLA」では、子どものパフォーマンス（言語行動、言語運用能力）を評価の対象にしているため、パフォーマンスのレベルを判定するための評価尺度を参照します。一般的にパフォーマンスの判定には、以下の2つの評価尺度を使って判定する方法があります。

- ①包括的尺度：全体評価、総合的評価の際に用いられる尺度です。話す力や書く力は、内容を全体的に捉えて成功の度合いを判定することがあります。このような場合に包括的尺度が必要になります。なお、8頁で示した「JSL 評価参照枠〈全体〉」は、子どもの在籍学級への参加の関係や支援の段階を包括的尺度に基づいて明示したものです。
- ②分析的尺度：言語能力を支えている知識や能力を分析して、それらを評価対象項目として位置づけ、パフォーマンスのレベルごとにその特徴を記述したものです。評価の際には、項目ごとにパフォーマンスの特徴を分析しレベルを特定します。ただし、各項目のレベルが必ずしも一致するわけではありませんので、全体評価のように結果をまとめることはむずかしくなります。しかしながら、子どもの強い点や弱い点については比較が可能になるので、より細かく把握することが可能です。「JSL 評価参照枠〈技能別〉」はこの考え方をもとに作られています。

・「DLA」では、両尺度ともに6レベル、発達段階を意識して6ステージという名称に分けて記述しています。

### 7-2. 技能別の採点・評価

- ①技能別の採点では、技能別に用意された「診断シート」を使用し、パフォーマンスのレベルを採点・評価してください。
- ②採点欄は、3段階「5・3・1」で表示したものと「正・誤」「正答・無回答」（〈話す〉）で表示したのがあります。いずれも、必ず点数が明示され、合計点、平均点が計算できるようになっています。

### 7-3. ステージの判定

- ①ステージ判定には、「DLA」の結果として出てきた得点を平均値化します。
- ②「DLA」で得られた結果を「JSL 評価参照枠」のステージに反映させます。
- ③ステージの記述文を参照して、実際の子どもの能力と比べます。
- ④平均値から出された数値が該当ステージの記述内容と一致しない場合、記述内容を優先してステージを判定します。

・子どものステージの判定はやさしいものではありません。なぜならば、子どもの潜在的な能力を測定するためには、30分から40分程度では十分ではないからです。「DLA」を実施して得られた情報は、あくまでも限られたものであって、「JSL 評価参照枠〈技能別〉」と参照し、子どもの現段階でのステージを推測したり予測したりするものであると考えることが大切です。

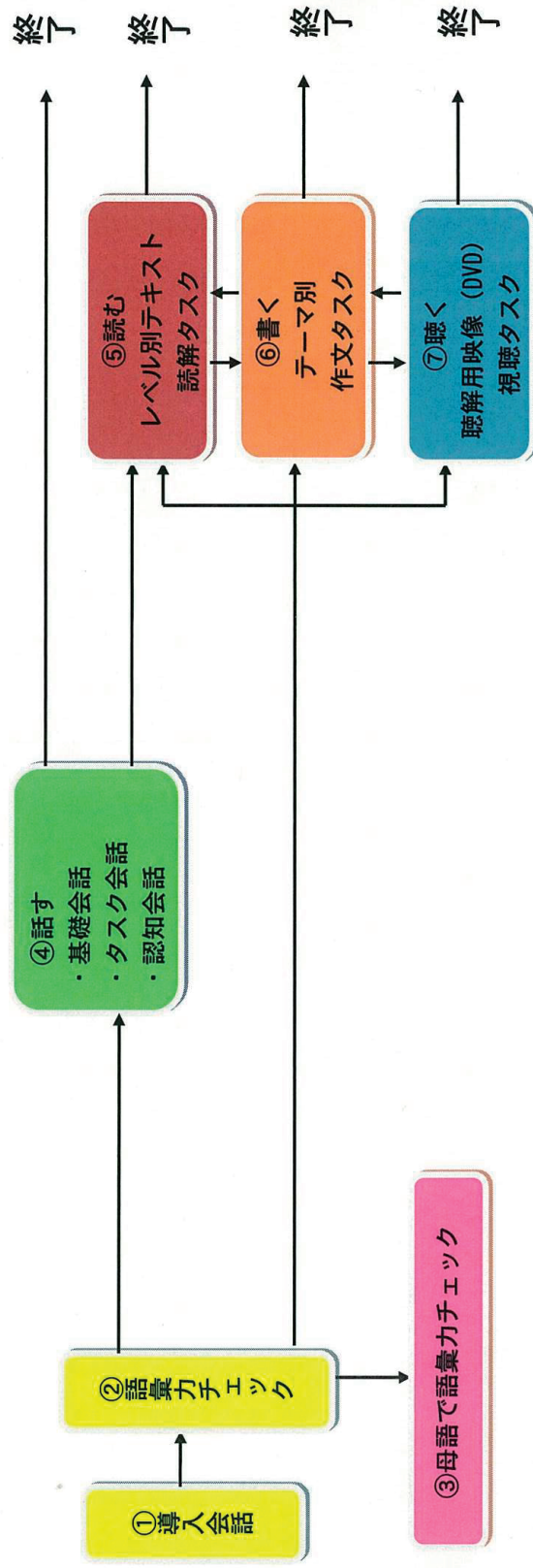
・ステージ判定では、「DLA」の結果として出てきた得点とともに、日頃の子どもの学習成果を「JSL 評価参照枠〈技能別〉」の中で位置づけることも大切になります。

## 8. 「DLA」の流れ

- ・以上述べてきた「DLA」の構成と実施の流れを次ページに示します。
- ・観察により子どものステージが予測できない場合は、指導者あるいは実施者は、①「導入会話」②「語彙力チェック」によって子どものレベルを確認します。④〈話す〉に進むか、⑤〈読む〉⑥〈書く〉⑦〈聴く〉に進むか判断してください。文字がわかるレベルであると判断された場合は、④を省略しても構いません。⑤⑥⑦の実施の順序は、子どもの日本語力に応じて柔軟に対応してください。

## 観察による「JSL 評価参照枠」のステージ予測

ステージ予測に迷う場合に評価を実施：個々に応じて評価ツールを選択



評価・診断結果による「JSL 評価参照枠」のステージ確定

支援のあり方へのヒント

・1回の実施で全ての「DLA」を行うのは望ましくありません。数日に分けて実施することを心がけてください。なお、どのくらいの頻度で実施するかについてですが、指導や学習の成果を把握するために実施する場合は、半年に一度実施するのがよいでしょう。また、指導の在り方を検討するための情報を得るために実施する場合は、その都度実施することも可能です。

・所要時間は子どもによって、また、与える課題によっても異なりますが、以下に目安を示しておきますので、実施計画の参考にしてください。

DLA 〈はじめの一步〉	5分程度
DLA 〈話す〉	10～15分程度
DLA 〈読む〉	20～30分程度
DLA 〈書く〉	20～40分程度
DLA 〈聴く〉	15～20分程度

## 9. 「DLA」の評価における機能と精度

・「DLA」は、日本の学校で学んでいる外国人児童生徒の日本語能力を明らかにして、現在の子どもの実態を把握した上で、どのような指導や対応が必要かを知るための評価ツールです。

・「DLA」の評価の機能としては、「診断的評価」、「形成的評価」、そして「総括的評価」が挙げられます。

・「診断的評価」とは、編入学当初や日本語指導開始時における、子どもの日本語能力、母語力、入国年齢、滞日年数、生活経験の実態等を把握するために行う評価です。

・「形成的評価」とは、日本語指導や授業の開始後に子どもの学びやつまづきなどを把握するために実施するもので、得られた情報をもとに支援の在り方や支援の内容などについて検討を行います。

・「総括的評価」は、学期末や学年末に実施して、子どもの将来の見通しについての検討を行います。例えば、取り出し指導や入り込み指導の回数や期間などの検討です。

・「DLA」は上記の目的を達成するために、子どものパフォーマンスに注目しています。

・パフォーマンスに焦点をあてた評価ツールであるために、テスト理論で言われているテストの妥当性や信頼性については新たな測定法という観点から考察する必要があります。

・妥当性とは測定したい知識や能力を適切に測定しているかを問うもので、信頼性とは測定結果に一貫性があり測定の誤差が少なく安定していることを示す指標です。

・この点からみると、「DLA」は、日本語を使わなければならない状況を設定して、子どもの日本語力を最大限に発揮させられるよう構造化されているので、妥当性は高いといえます。

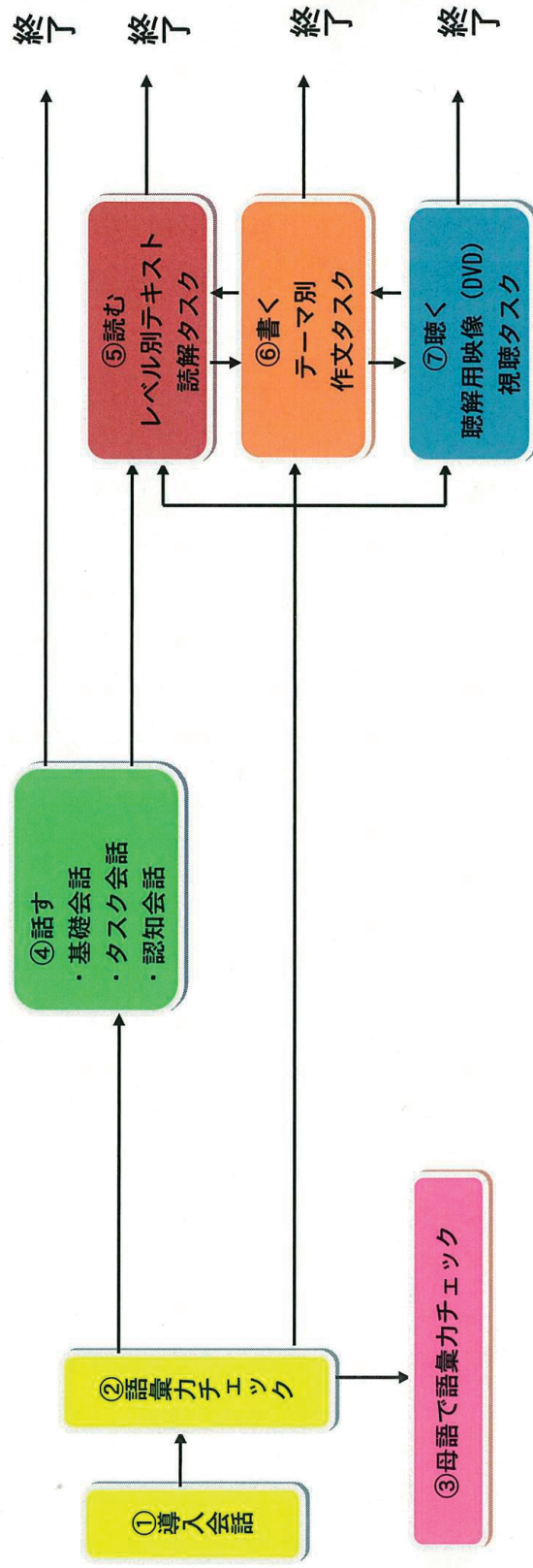
・一方、信頼性については、実施者の質問や応答の仕方によって、また、実施するための環境要因によって、子どもの反応が異なる場合があったり、実施者の採点や評価の仕方が主観的になる傾向もあって、結果における信頼性の確保はむずかしいことが挙げられます。

・信頼性を高めていくためには、実施者向けの訓練を充実させることが必要です。

・また「JSL評価参照枠」の中身についても、今後、検証を重ねながら、精度を高めていく必要があります。

## 観察による「JSL 評価参照枠」のステージ予測

ステージ予測に迷う場合に評価を実施：個々に応じて評価ツールを選択



評価・診断結果による「JSL 評価参照枠」のステージ確定

支援のあり方へのヒント